

五山の送り火 送り火の一つが別の文字であった可能性

安井 悠一郎

(丸田 博之ゼミ)

目 次

はじめに

第1章 五山の送り火の歴史と変化

第2章 左大文字について

第3章 別の行事との共通点並びに送り火の意味

第4章 仏教における「大」の意味

おわりに

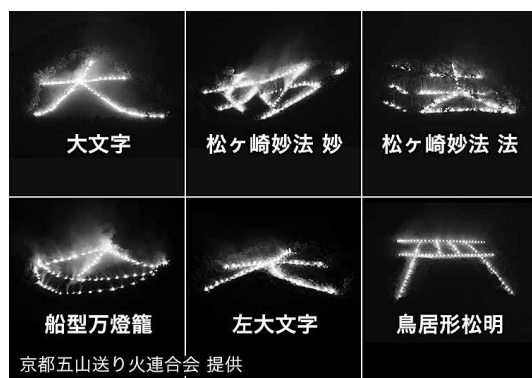
はじめに

京都人であれば、だれもが一度は見たことがあるであろう「五山の送り火」、他の地方では「大文字焼き」という別名があるほど有名な京都の伝統文化の1つである。京都は寺や神社も有名だが、各行事はかなり大掛かりである。様々な祭りや季節の行事が行われているが、中でも京都三大祭の「葵祭」「祇園祭」「時代祭」と、お盆の「五山の送り火」は別格と言われている。五山の送り火は京都盆地を取り囲んでいる東山、北山、西山に「大文字」「左大文字」「妙法」「船形」「鳥居形」の3つの文字と2つの形で構成された大規模な行事である。この行事の目的として、お盆にお出迎えした精霊を再び冥府に返す精霊送りの意味を持つ、日本古来の信仰と仏教の行事が結びついたものになる。我々は、火に向かって手を合わせ、先祖への感謝の念と現世の人々の安寧を願うのである。

私の地元は五山の送り火の5つの形の内、「鳥居」「左大文字」の両方を見ることが出来る位置にあり、毎年送り火を見ることが習慣になっている。地元民だけでなく外国人観光客からも愛された行事であり、歴史の長い伝統文化である。しかし、長い歴史があると述べたがいつの時代から行われたのか、文字の意味、なぜ「大」の文字が2つあるのかなど疑問な点が多くある。五山の送り火は、多くの不明点や様々な説がある中で、目玉である

「大文字」があるにも関わらず、なぜ「左大文字」があるのか、大が2つある理由や左大文字の存在理由に興味を持った。そのため、「左大文字」は元々「大」の字ではなく、別の文字であった可能性も無きにしもあらずと考えたのである。

その別の文字の候補として考えられるのが、「大」の文字に「一」を加えた「天」の文字である。理由として、各送り火には、それぞれ宗教色が存在するが、天台宗に関するものが存在していないこと、それに、左右二つの大文字を比べた場合、明らかに左大文字が小さく、如意ヶ嶽の大文字の火床が75箇所であるのに対し、左大文字の火床は53箇所であり、もし、先ほど述べた「天」の文字であったなら、火床の数と送り火の大きさが大体比例するからである。(画像1)



画像1 (五山の送り火)

冒頭でも述べたとおり、五山の送り火はいまだ十分な研究が進んでおらず参考にできる資料が少ない。資料や歴史が不明な点が多い理由として、お盆行事全体に言えることだが、これらの一連の行事は祖霊信仰と仏教が結びついた宗教的行事であり、地元の人々の信仰によって始められ、受け継がれてきたものであるため、国家的・政治的なものではないことから、公的な記録にとどめられ

なかったのではないかと考えられる。そのため、祇園祭や時代祭、葵祭のように明確な記録がない点が五山の送り火の特徴と言える。これらの点から、現時点で明確になっている送り火の歴史を整理し、五山の送り火が取り上げられている数少ない論文や資料を参照し、自分の考えを述べていく。また、送り火がどのように継承されてきたのかを調べていき、左大文字送り火に関する考察を進めていく。他にも、五山の送り火には不明な点が多いことから、他の祭りや行事との比較を行い、送り火に込められている思いや目的なども推測していきたい。最後に、別の視点として「大」の文字に込められている思いや意味、仏教とのつながりなどを論じ、「左大文字」の可能性を検討していき、別の文字であった可能性がありかなしかを明らかにしていきたい。

第1章 五山の送り火の歴史

1-1 十山の送り火

この章では、現在解明されている「五山の送り火」の歴史を明確にしていきたい。送り火という行い自体は室町時代から行われていたと推測されており、江戸時代初期には京都の夏の恒例行事として定着したと言われている。明治初期までは五山ではなく「十山の送り火」と呼ばれ、十の形、文字が存在していたという内容はかなり著名である。現在の送り火に加え、市原の「い」、鳴滝の「一」、西山の「竹の先の鈴」、北嵯峨の「蛇」、観空寺村の「長刀」があったと言われている。これらは巨大な規模で多様な意匠や形状が山中に刻まれていることから、農民や郷民の風流の競合の趣があったのではとも考えられている。これらの消滅した五山も詳しい歴史が解明されていないが、市原の「い」の送り火は最近になって場所や痕跡が発見されたい。

京都大学霊長類研究所の正高信男教授並びに、もう1つの説を立てた京都精華大学の小椋純一教授により「い」の文字が灯されていた場所が絞られた。発表内容によると、正高信男教授は、明治の半ばごろまでは「い」の文字が送り火として行われていたと主張した。途絶えた文字の正確な場所が特定できずにいたが、同氏は江戸時代の文献

などを手がかりに実地調査を繰り返し、「い」の場所を特定したそうだ。結果として、京都市左京区の鞍馬二ノ瀬町にある、地元で「安養寺山」と呼ばれる山に、縦5メートル、横15メートルほどのL字型に削った跡が3か所、見つかったという。この跡は、現在も使われている送り火と共通点があることから、安養寺山で「い」の送り火が行われていたとされていた。しかし、京都精華大学の小椋純一教授は違う説を立てており、安養寺山から南西に1キロほど離れた京都市左京区静海市原町の「向山」だと主張している。根拠として、地元の住民の伝承や「い」の文字が地名の市原を意味しているからだとする。また、「い」の文字は京都市の中心部から離れていたことから、現在の送り火で最も大きい「大文字送り火」よりも大きかったかもしれないとも考えられている。現在は、向山は木々が多いため、痕跡の確認は難しいが、地元民の情報として「祖父から聞いた話で「い」の送り火は向山で行われていた」という証言もあったことから、現在では「い」の送り火は向山で行われていた説が濃厚とされている。

こうした研究により、他の形、文字も痕跡などが見つかると思われたが、地形の変化、自然災害などの影響で現在でも解明できずにいる。また、所蔵地理データベースから『京都區組分細圖』（明治14年〔1881〕）から「い」の送り火が地図に記されていることが確認でき、それ以外の消滅した4つの送り火は記載されていないことから、明治中期から終期に至り、送り火の数に変化があったことが推測できる。そのため、消滅した5つの送り火は一斉に消滅したわけではなく、少しずつ数が減っていったことが推測され、時代によっては、「六山の送り火」などと言われていたかもしれない。

1-2 俗説

次に「大文字」の送り火についての俗説をまとめていく。現在上げられている説は3つあり、これは京都市文化観光資源保護財団から出版されている『京都大文字五山送り火』（2001）に詳しい。

如意ヶ嶽の大文字送り火の俗説1つ目として、創始者が空海だという説がある。

『都名所図会』などの記すところで、住古山麓にあった浄土寺が火災にあった際、本尊阿弥陀仏

が山上に飛来して光明を張ったことから、光明を模って点火したものを弘法大師が「大」の文字として改めたというものである。しかし、その後近世に至るまでいかなる記録にも大文字のことが記されておらず、信憑性に疑問が持たれている。

2つ目の俗説として、創始者が足利義政という説がある。足利義政の発意により、相国寺の横川景三が指導して足利義政の家臣芳賀掃部が創設したという内容だ。しかしこれも最初に紹介した俗説と同様に根拠となる資料が少ない点や承認したい点があることから、説としての信憑性は薄いとされている。

以上から、これまで紹介した俗説は可能性として低いと言われているが以下の説は最も注目されている説になる。3つ目の説は寛文2年（1662）に刊行された『案内者』に、次のように記されている。

山々の送り火、但し雨ふればのぶるなり。
……松ヶ崎には妙法の2字を火にともす、山に妙法というふ筆画に枕をうち、松明を結びつけて火をともしたるものなり。北山には帆かけ船、浄土寺には大文字皆かくの如く。大文字は三藐院殿（近衛信尹）の筆画にて、きり石をたてたりといふ。

著者の中川喜雲は寛永13年（1636）生れであり、慶長19年（1614）に没している信尹と年代的にあまり離れていない点や信尹は本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに当代の三筆といわれた能筆家である理由から、この説の妥当性が考えられなくもないものとして注目された。

こうして紹介したなかでは最後の説が一番可能性としては高いと長年言われて来たが、実は最近の調査で大文字送り火に関する古文書や大文字山が銀閣寺領であったことが記載されている資料が銀閣寺から発見され、記載内容から送り火は室町中期に足利義政を創始者とする第2説がにわかに浮上しているとされている。記載内容は不明だが、したがって1つ目に紹介した説以外のものは可能性として考えられる説として研究が進んでいる。

1-3 十山から五山へ

送り火の歴史でも紹介したように、明治初期までは10の送り火があったと言われていた。なぜ消滅してしまったのかを左大文字に触れていく前に考察していきたい。

まず考えられるのは、資金難や人手不足である。五山の送り火が始まったと言われる明治初期は地元民で執り行われていたことから、火種となる麦わら、松割木、護摩木などを集める方法が少なかったことが考えられる。現在の送り火は準備に半年から1年を費やしている点から昔も相当な時間がかかっていたことが推測できる。「大文字」の送り火では薪600束、松葉100束、麦わら100束とかなりの量を使用しており、10の文字、形があったことから、単純に考えると先ほどの束の10倍の量を必要とする。現在の「大文字」の保存会の会員数は52戸に至るため約70人以上のメンバーがいることが考えられ、明治時代当初に地元民だけで70人も集めていたとは考えにくい。これらの点から継承していくために数を減らし、人数の確保により今の形態として受け継がれてきたと考えられる。

次に立地の問題がある。所蔵地理データベースから先ほどと同じ『京都區組分細圖』の地図を閲覧すると、消滅した5つの送り火が灯されていた地域や区には、町や住宅から離れているといった特徴があり、山々に囲まれていることがわかる。この地図では市原の「い」が記載されており、記されている場所も山々に囲まれており、京都の町から少し離れていることから、ある一定の場所までいかないと「い」の送り火は見られなかった可能性が考えられる。詳しい場所は不明であるため、想像になってしまうが、当時、十山の送り火が実施されていた時代では消滅した送り火を含め、送り火を灯す者がいたとしても、その送り火を見る者が少なかったと推測される。元々は、宗教行事であったことから、楽しむ行事という考えよりも、地元民が自分たちのために行ってきた行事であるため、「祭り」として認知されるのも時間がかかったであろう。夏の行事として、定着したことにより、送り火が宗教行事という考えから「祭り」と変化していき、送り火を鑑賞してもらうために行われるようになったのであれば、祭りを開催する

者と祭りを楽しみ鑑賞する者、つまり需要と供給が必要となる。しかし、需要となる鑑賞する者や送り火を見届ける者が少なかったこと、立地として京都の町から離れていたことにより、効率化や運営する側のことも合わせ考えると、5つが消滅し、今の送り火が残されたと考えられる。

これに関しては、鯉坂学氏の論文に以下のようにある。

ムラと都市ではケンプツ人の有無、祈るカミの性格や内容も異なる。また、かつてのムラのマツリでは、カミに奉仕するスル人々とそれを囲むミル人々という区別された構図があった。しかし、現代のムラでは、スルとミルの構図が変形し、都市のマツリのように、カミの位置が後退し、スル人々がミル人々を前提とするミセルマツリへと変わってきている。
(鯉坂学 2022 「五山送り火行事の持続と変容：京都市松ヶ崎の妙法を事例に」『同志社社会学研究』)

すなわち時代が進むことで祭りに対する考え方も変化し、「祭り」を継承する者が減少し、送り火もその一つで十山から五山へと変化したと考えられる。

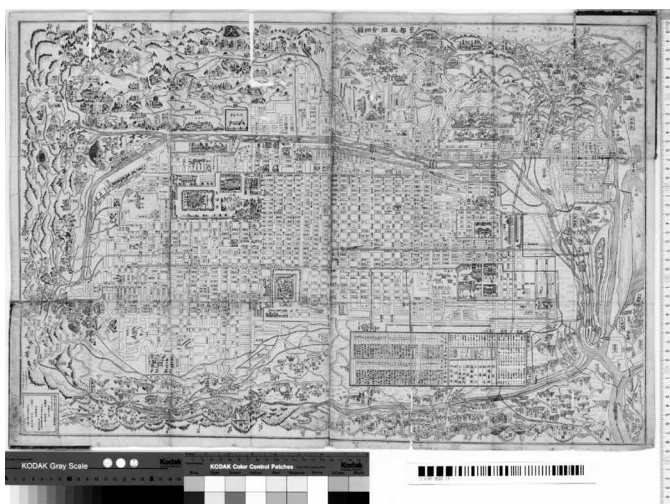
最後に最も有力な説として、現実的な人手不足

や資金難という理由ではなく、時代の変化により消滅したという説を挙げておきたい。

明治5年から明治15年まで、新政府の命令により、送り火の活動が御法度になったという事実がある。理由として、元々日本は6世紀後半から7世紀にかけ、仏教が広まり神仏習合の考えが一般化された。神仏習合を簡単に紹介すると、日本の神と仏が混ざり合い、同一視されることを指しており、明治初期までは、神と仏は同じ儀式をされていた。しかし、政府が「神仏分離令」を出したことにより、神社と寺院は別々の存在となってしまった。そして、送り火が本来仏教行事であるにも関わらず「鳥居形」があることから、送り火という行事が神仏習合であるとされたことで、一時的に送り火が活動禁止となったのである。

このように、明治という時代の影響で「送り火」という行事が見直され、5つの送り火が消滅したと推測される。正直、なぜ消された送り火があつたのかは不明だが、考えると様々な苦難があつたにも関わらず、今年も送り火を見られているということは日本人の神と仏に対する信仰心が認められたのかもしれない。

以上三つの理由に濃淡はあるけれども、最終的に十山の送り火は維持できなくなり、5つの送り火が少しずつ消滅していったと思われる。



(所蔵地理データベース『京都区組分細圖』(1881))

https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=002156180

第2章 左大文字について

ここでは、本稿の主目的である左大文字についての歴史を明らかにしていきたい。

「左大文字」の判明している歴史から掘り下げていくと、由来や起源などは他の送り火と同様に不明な点が多いが『洛陽名所集』万治元年（1658）には記載がなく、『扶桑京華志』寛文5年（1665）に、左大文字の記載があることから、少なくとも1665年までには存在していたことがわかる。『扶桑京華志』には以下のことが記載されている。

大文字、北山村の西山に火を似て大を燃やす。伝えるところ、これまた妙法の筆画なり、左大文字、京の町より北山をのぞんで左にあるところなり

すなわち、このことから、「大文字」に遅れて「左大文字」は作られたのであり、そのタイムラグのあいだに「天」が「大」に変化した可能性は僅かながら残される。

そこで、先ほども使用した鯉坂学氏が研究された送り火に関する論考を参照し、自分が立てた説と比べ、左大文字について述べていく。

最初に左大文字の歴史から現在の保存会までを調べ推測していく。

左大文字送り火は江戸期まで京都近郊の大北山村の人々によって行われてきたが、同村が1889年の市制町村制に伴い近隣6村により衣笠村として合併され、1920（大正9）年に京都市に編入される過程で左大文字保存会が結成され、送り火行事を維持してきた。この地域には近くにある金閣寺（鹿苑寺）の不動明王への信仰が根付いている。

左大文字の送り火の始まりは、1658年ごろから1670か80年代の初めまでであろうと地元では認識されている。現在の火床数は53床であるが元々は43床であり、1964（昭和39）年に上下左右それぞれ2床ずつ増やされた。昔は固い山肌に丸太の先をわずかに打ち込んだその先に鉄製の籠をつり下げるといった方法であったが、現在は栗石を積み上げてセメ

ントで固めた火床を使っている。

このような内容から左大文字の火床の数は初期は今より更に少なく、それが近年になって増えた結果、現行の火床数になったようである。そうするとこれは、十山の送り火が消滅し、1つの送り火に費やせる麦わら、松割木、護摩木などが増加したからという点が推測できる。また、かつては、固定された火床がなかったことから、荒縄を張り、形を決めていたため左大文字送り火の初期は形が定まっていなかったと言われている。そのため、初期のころは小規模で行われ、毎年恒例行事になっていったことで規模も拡大していき、火床の数の増加や位置の固定化が行われ、今の送り火に繋がっていると考えられる。つまり、この内容から考察すると、左大文字は初期から「大」の文字であったが形や大きさが固定されていなかったことから、大文字送り火よりも小規模で行われており、行事化したことで現在の左大文字の様相になったと推測できる。また、左大文字は大文字送り火を参考に形を形成したと言われているため、もとより、43床の前になる以前のことは不明ではあるものの、自説である別の文字であった可能性は低いことになる。また、公益財団法人の京都市文化観光資源保護財団が管理する五山の送り火に関する記述から、左大文字送り火は化野などで葬送された方々の霊を弔ったものと言われているため、送り火にはお盆にお迎えしたご先祖様の精霊に違いがあるとも考えられる。

つまり、大文字送り火は1章で述べた足利義政が始めたという説があることから、戦争や争いで亡くなった人々の精霊を再び冥土に返すという意義があり、一方、左大文字は村の住人や地域住民のご先祖様の精霊を冥土に返すという意義があることから、結論として、2つの「大」の違いには、お送りする精霊、魂、ならびにそれを作成した主催者側の経済規模に違いがあると考察されるのである。

では、この二つの大文字の関係性から左大文字の成立過程を見ていきたい。同じく鯉坂氏の論考によると

送り火の行事は保存会役員を中心に年間を通じて準備が行われており、役員会は送り火を

運営している五山で構成する「大文字五山保存会連合会」（近年は京都五山送り火連合会と改称）や市行政や市観光協会との連絡調整も重要な役目となっている。

1962（昭和 37）年以来、大北山地域の地元家系の親類でなければ会への入会を許可しないという入会基準が設けられ、新入会員を補充している。保存会は男性のみにより構成され、準会員を経て正会員になれる。中学一年生の 13 歳で保存会に入会できるようになり、その後 15 歳までの 3 年間は準会員として行事を手伝う。準会員は 3 年間で修了すると正会員となる。その年、準会員から正会員となった者のうち 2 名の新正会員が、松明行列の行進前に各家の軒先に設置されたかがり台に盆の精霊の火を灯して回る役割を任される。この各家のかがり台への点火は、見物人の注目を浴びるため、当人にとって晴れ舞台になる。かがり台に点火するたびに、見物人、信仰者から歓声や拍車が起り、この行為を経験することによって、新正会員は保存会会員に正式になったことの意味と重み、喜びを肌で実感する。正会員になった後は、毎年、先輩の指導の下、送り火行事に携わることによって一人前と承認される。準会員から始まり、それから 10 年、15 年と継続して行事に貢献し、最終的には市長表彰を授かることが理想と考えられている。

左大文字送り火は、左大文字保存会を中心として担われているが、このほかに旧大北山村出身者に継承されてきた不動講員、尼講員によって成り立っている。不動講は全員が、左大文字保存会で活躍していた OB で構成されている。不動講は、保存会とは別に護摩木志納を募り、それを左大文字山に運び上げるというかたちで、送り火を支える役割を果たしている。また、送り火の当日に法恩寺で御詠歌法要を行なうかたちで行事に関わる尼講の組織がある。この組織の成員は地元の高齢女性によって構成されている。左大文字の地元地域の各家族をみると、父は不動講員、母は尼講員、息子は左大文字保存会員という、家族の三構成員による宗教生活上の関係が多く

の家系で継承されている。

大文字送り火の行事を担っているのは、特定非営利活動法人大文字保存会（以下、「保存会」と略）という NPO 法人である。主な活動目的は大文字送り火の運営だが、地元の八神社の信仰祭の運営も町内会とは別にこの保存会が担当している。保存会のルーツは、京都市成立以前の浄土寺村の住民の子孫とされる。1889（明治 22）年の市制町村制により浄土寺村は京都市の一部となり浄土寺町になった。昭和になり人口が増加し町の数も増えたが、浄土寺村にルーツを持つ 47 軒で送り火を維持していたと言い伝えられている。第二次世界大戦などの戦争で送り火は一時期途切れてしまっていたが、この 47 軒が戦後の 1947 年に送り火を再興させ、毎年点火を行っている。現在は旧浄土寺村の一地域である銀閣寺町と銀閣寺前町を中心とした地域に住む 42 軒が会員として登録され、1999 年に NPO 法人化されて送り火の活動を行っている。昭和の中頃までは、銀閣寺町保存会という名称で町内会の役割も果たしていたが、1962（昭和 37）年に京都市から送り火のために助成金があるようになり、経費を明確化する必要があったため、その年に送り火の運営の部分のみが大文字保存会として分離し、現在に至っている。会員の家が分家した場合には追加での登録を認めるが、地域の人口が増加する中でも、それ以外の外部からの新たな会員の登録は認めていない。離脱については各家の判断によるもので、退会を申し出ることでその家は登録から外されることになっている。

とあり、これらの継承方法から、2 つの送り火での継承方法に大きな違いは無く、地域住民が親から子へと継承していることから、保存会同士での協力はあまりないと考えられる。そのため、組織として祭りを完遂させるという目的は同じだが、それぞれが独立した組織として活動しているため、よそはよそ、うちはうちという考えで「大」が 2 つあるという疑問は持たず、京都の伝統文化を継承させることだけに専念していると思われる。これらの点からも、やはり送り火が継承される上で文

字の変化があったとは考えにくい。

継承されるのに、左大文字送り火では準会員から始まり3年から10年を費やし正会員になることから、伝統的思想や継承する思いが強いため、継承する上で元の文字から大の字に変更するとは考えにくい。結論として、恒例行事と化してからの送り火には文字の変化はなかったものと考察する。

このように、送り火の過去や継承方法を明らかにしてきたことで、左大文字送り火の初期のことを考えると先ほど述べた内容と同様に「左大文字」が元々「大」の字ではなく、別の文字であった可能性は低いことが考えられる。

しかし、「大」に込められている意味や思いはまだ明らかにできていないため、次に2つの「大」の文字に込められている思いや違いを考察していく。

三 別の行事との共通点と送り火の意味

この章では、「大」に込められている思いや意味、宗教とのつながりを論じていく。筆者は「大」の文字について考えた際、1番印象の強い行事として本稿のテーマである「五山の送り火」を想像するが、もう1つ思い浮かべる行事として「お宮参り」がある。

お宮参りとは、赤ちゃんが無事生まれたご報告と、今後の健やかな成長とご加護をその土地の氏神様にお祈りする行事である。時期としては生後一ヶ月の良き日を選んで神社に参るそうだ。お宮参りを思い浮かべた理由として、加護を受けるお祈りをする際に、まじないの意味を込め鍋墨や紅を使用し、赤ちゃんのおでこに「×」の印や「大」「小」の文字を書く風習がある。そのため、五山の送り火とお宮参りの共通点として、両方とも「大」の文字が使われていることから、2番目に印象深い行事として「お宮参り」を上げた。他にも、共通する点があり、両方とも宗教的行事だという点である。これらの点から、お宮参りの紹介も加え、2つの行事との共通点を探り、五山の送り火の「大」に込められている意味や可能性を考えていきたい。(画像2)

お宮参りと五山の送り火の共通点は3つある。1つは、お宮参りの定着した時期が室町時代とさ



画像2 (お宮参り)

れており、送り火も室町時代から小規模ではあるが行われていたと言われているため、行事として定着した時代が同じであるという点である。起源として、この時代では現在よりも赤ちゃんの出生率や生存率がかなり低く、無事に成長することさえ難しい時代になる。そのため、生まれてきた赤ちゃんが元気に育つように神様の加護を授かるうとしたのが起源とされる。定着したのは室町幕府第3代将軍である足利義満が生まれた際に行われた大規模なお参り行事が、お宮参りとして周知され、現代でも伝統行事として、同じスタイルで続いていると言われている。五山の送り火も起源は明確化できていないが、送り火を行う目的として、先祖への感謝の念と現世の人々の安寧の意味が込められていることから、両方の行事とも、健康や平穏を願うという意味は共通点だと言える。

2つ目に、行事を行う目的とする意義に共通点がある。

田口祐子氏によれば、従来のお宮参りには、「産の忌明け」「社会からの承認」「鎮魂」という意義が込められており、「鎮魂」に関しては、お宮参りの根幹をなすものとして考えられている。その理由として、病気などの原因が怨霊によるものだと考えられていたことから、魂を鎮める鎮魂の意義があると考えられる。送り火も御先祖や死者を冥土に送る行事と同様に、お宮参りも加護を授かる目的だけでなく、死者に対して行う宗教行事である点は共通する点として挙げられるのである。

最後は3章の冒頭でも述べたように、当たり前と言えば当たり前だが、大文字送り火と同様に、お宮参りにも「大」の文字が使われている点になる。お宮参りでは、おでこに「×」の印や「大」

「小」の文字が書かれると述べたが、「大」「小」の文字が書かれるのは京都を中心とする関西だけであり、他県では、「×」や「・」の印を書くのみである。これは「あやつこ」と呼ばれ、災難から赤ちゃんを守る魔除けの意味が込められている。

これらの点から、おでこに書くという風習は各地で同じでも、印として刻まれる文字には違いがあることが分かる。京都では、男の子には「大」、女の子には「小」という風習があり、主な意味は同じだが「大」には元気に大きく育つように、「小」には優しく健やかに育つようにという意味が込められているようだ。元々は関西も「×」や「犬」「・」の印や文字だったらしいが、時代の流れから「大」「小」になったと言われている。これは、京都での宗教行事が多い点や宗教文化がある部分から、宗教の世界で魔除けの意味を持つ「大」の文字になり女の子には「大」の対比となる「小」の文字が使われているようになったのではないかと推測される。

この章の結論として、送り火には先祖を冥土に送る目的だけでなく、「大」に込められている意味も含め、鎮魂、健康祈願、魔除けの加護を授かるという意味も込められている宗教行事だと結論づけ、大文字と左大文字の違いとして、男性、女性に見立て2つの「大」の文字が存在すると考えられないだろうか。

第4章 大について

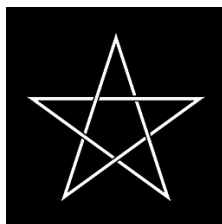
ここでは、再度仏教の世界で「大」がどのような意味があるかを考察する。

まず根本的に、大の字がなぜ魔除けの意味が込められているのかを検討していく。

「大」について調べていくと仏教用語である「五芒星」という言葉にたどり着いた。五芒星とは、互いに交差する同じ長さの5本の線で構成されており、中心に五角形が現れる図形のことを指す。5つの角は、5つの要素を表すことができる図形とされており、西洋、東洋では魔術や魔除けの記号として使用されていると言われている。日本では、万物のすべてを構成する5つの元素となる木・火・土・金・水の動きの概念が由来とされる。また、西洋、東洋同様に日本でも陰陽道の世界で魔

除けの呪符として伝えられている。(画像3)

陰陽道では五芒星の印に、あらゆる魔除けの呪符が込められており、重宝されてきたと考えられる。そして魔除けの印として伝えられている五芒星の形から連想される文字として「大」が使われたのではないかとと思われるのである。



画像3 (五芒星)



画像4 (陰陽)

次に、五芒星と深い関わりのある「陰陽」であるが、陰陽思想は、古代中国に端を発し、森羅万象、宇宙のありとあらゆる事物をさまざまな観点から陽と陰の二つのカテゴリに分類する思想のことを指している。(画像4)

「陰陽学説」という考えがあり、日常のあらゆるものや状況を陰陽で分類することができ、簡単なものでいうなら陰は日かげ、陽は日なたと分類される。日かげと日なたをイメージして連想していくと、日かげは冷たく暗い。冷たいものは水であり、低い方へ下る性質がある。日なたは温かく明るい。温かいものは火であり、高い方に上る性質がある。さらに、太陽の上の方角(東)は陽であり、沈む方角(西)は陰である。温暖になれば生物は活発に動き、寒冷になれば静かになる。暖かいのは南であり、寒いのは北である。このように、物事を陰陽に分けていくことができるとされる考えが「陰陽学説」になる。男女も陰陽に分けることができるとされ男が陽で女が陰と言われている。また、左右も陰陽にわけることができ、左が陽で右が陰になるようだ。このように陰陽が当てはめられる理由として、「正面(南面)を向いた場合に太陽が昇る東側が左になり、沈む西が右にあたるため」という説がある。シンプルな疑問にはなるが、なぜ南が正面になるのか。それは、中国の書物『論語』に「天子は南面する」つまり皇帝や天皇は南を向いて君臨するとあるからとされている。不動の存在の北極星を中心に見立てて、そこ

五山の送り火 送り火の一つが別の文字であった可能性

から世界を見渡すので、北を背にして南を向くので南が正面ということになる。

このように、陰陽の思想を用いて考察すれば、「大文字」は陽、「左大文字」は陰という考えはあながち間違いではないかもしれない。「陰陽学説」の考えとは通称は左右逆になるが、「左大文字」という呼称が、近年便宜上付けられたことはすでに述べた通りである。

さて、送り火の目的は何度も述べているが、8月16日のお盆にお出迎えした精霊を再び冥府に返す精霊送りを目的としており、シンプルに考えると、精霊送りの行事に魔除けの意味があるのはいささか不似合いな感がある。しかし、無事にご先祖の精霊が冥府に帰ってもらうために、魔除けを付加することは子孫の思いやりと言えないこともなかろう。

おわりに

本研究で、様々な視点から五山の送り火について、考察してきた。送り火に対して筆者が疑問に感じていた内容の結論を最後にしっかりまとめていく。

筆者が明らかにしたかった内容の1つ目として、左大文字送り火が、元々は別の文字であったかもしれないという仮説を立て、左大文字の歴史を深堀りしていきたいと考えた。結論として、左大文字送り火が行われているようになった初期のころから、文字の形や送り火の大きさに多少の変化はあったものの、文字の変化はなかったと結論を出した。理由は2つあり、1つ目は左大文字は大文字送り火を参考に作られた送り火であったと言われていることから、小規模で行われていた初期の頃から「大」の文字であったと推測し、2つ目に、保存会の継承方法を調べた結果、京都の伝統文化であることから伝統的思想や継承する思いの強いことがわかり、送り火という文化を継承する上で文字を変化させようという考えには至らないと考えた。以上の2つの理由から、左大文字は初期のころから、「大」の文字であったと結論づける。

次の疑問点として、初期のころから「左大文字」であったのなら、なぜ「大文字」「左大文字」2つ

の「大」の字が存在するのかということがあった。これも自分なりの答えが2つある。1つ目に、2つの大にはお迎えお送りする精霊の違いがあるという考えだ。大文字は足利義政が始めたという説があり、左大文字は化野などで葬送された方々の霊を弔ったものと言われている点から、大文字が戦死した人々を弔い、左大文字は地域住民の亡くなった人々を弔うという違いがあるのである。2つ目の理由として、「大」の文字には魔除けの意味が込められており、「大文字」は男性に対しての魔除け、「左大文字」は女性に対しての魔除けの意味と男女で分けられている。その理由として、子孫の思いやりはあるとして、少し想像を広げれば、京都は平安時代では怨霊信仰という風習があり、人が怨念を抱いて死んでしまうと怨霊と化し、生きている人々に災害や疫病を引き起こすと言われていた。そのため、神や守護者として祭り、鎮魂の意味を込めた御霊祭が行われるようになったことから、送り火も精霊送りという主目的とは別に鎮魂並びに現世の人々に災害が起らないように魔除けの加護としての意味もあるのではなかろうか。また、送り火には、精霊を冥土に送る目的だけでなく、お宮参りとの比較や共通点を探ると、送り火には健康祈願、鎮魂の意味も込められていると推測される。根本的に「大」の字に魔除けの意味が込められている理由としては、陰陽道で使用される「五芒星」から来ていると考えた。五芒星は魔術や魔除けの記号として使用され、日本でも魔除けの呪符として伝えられている。そのため、五芒星の記号から形を取り、連想された文字として「大」という字に魔除けの意味が込められていると推測される。

これらの結果から、自分の仮説である左大文字は別の文字であったという可能性は少なくともはあったが、新たに送り火には精霊を冥土に送るという主目的だけでなく、男性女性に対する魔除けの加護を授かる別の意味があったり健康祈願、鎮魂など意義があるかもしれないことがわかったのである。

最後に本研究の限界点について述べていく。根本的に、五山の送り火に関する資料が少ない点である。送り火の歴史もあいまいな点があり、どこから模索していけばよいかという難しさがあった。俗説などが多い点があり、信憑性がなかったり確

信をつける要素が無かったりと五山の送り火の研究をする上で資料不足というのが難点だと感じた。今後は、保存会の継承者の方や保護財団に話を聞きに行くなどの活動を行っていけば、五山の送り火に関する不明な点、疑問点などはある程度解決できるかもしれない。

本研究の遂行に当たり、指導教官として終始ご指導をいただいた、京都先端科学大学人文学部歴史文化学科丸田博之教授に深謝の意を表します。本論文の執筆にあたり多くのご助言、激励を頂きました。本当にありがとうございました。

〈参考文献〉

- 芦田徹郎 2001 『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
- 和崎春日 1996 『大文字の都市人類学的研究』刀水書房
- 和崎春日 1997 『都市の祭礼の社会人類学：左大文字をめぐる一』日本民族学会
- 財団法人京都市文化観光資源保護団体大文字五山保存会連合会 2001 『京都大文字五山送り火』光村推古書院
- 田口祐子 2011 「現代における初宮参りの実態と意義」『宗教研究』84巻4号、1284-1285
- 鯨坂学 2022 「五山送り火行事の持続と変容：京都市松ヶ崎の妙法を事例に」『同志社社会学研究』26号、1-30

〔URL〕

- NHK NEWS WEB「京都五山送り火「い」の痕跡か」（閲覧日：11月15日）<https://web.archive.org/web/20180808140210/https://www3.nhk.or.jp/kansai-news/20180808/0005089.html>
- 京都観光オフィシャルサイト Navi（閲覧日：11月10日）<https://ja.kyoto.travel/event/major/okuribi/#:text=%E5%A4%8F%E3%81%AE%E5%A4%9C%E7%A9%BA%E3%82%92%E5%BD%A9>
- ウィキペディア「五山送り火」（閲覧日：11月10日）<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E5%B1%B1%E9%80%81%E3%82%8A%E7%81%AB>

文化庁「京都五山送り火」（閲覧：10月25日）
<https://www.gozan-okuribi.com/2022/ja/top.html>

記念撮影コラム「お宮参りでおでこに文字を書く地域は関西だけ？点・大・小等額の印としきたりの意味 関東は書かない？」（閲覧日：12月15日）<https://www.precieux-studio.com/column/omiyamairi-ayatsuko/>

ウィキペディア「五芒星」（閲覧日：12月15日）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E8%8A%92%E6%98%9F>

ウィキペディア「陰陽」（閲覧日：12月15日）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%99%B0%E9%99%BD>

ウィキペディア「御霊信仰」（閲覧日：12月15日）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A1%E9%9C%8A%E4%BF%A1%E4%BB%B0>